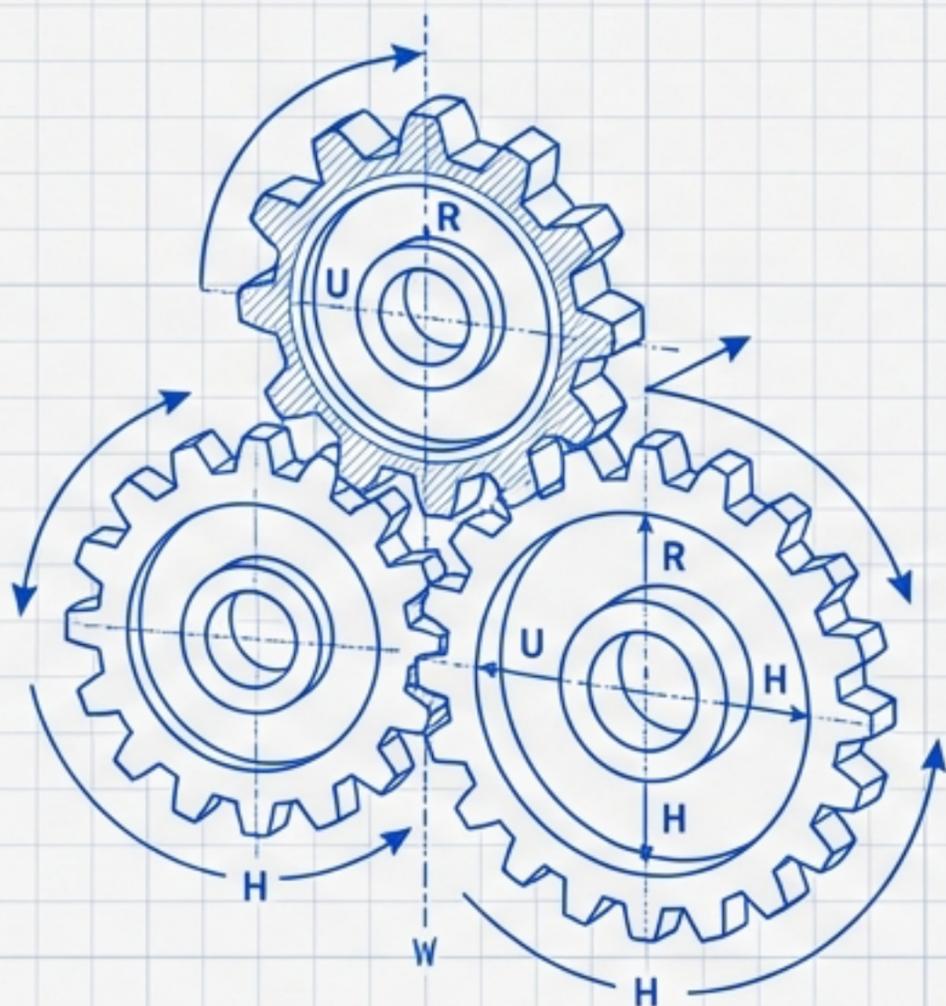


# 時間劣化と制度寿命

なぜ「成功した制度」ほど、説明不能になり突然死するのか？

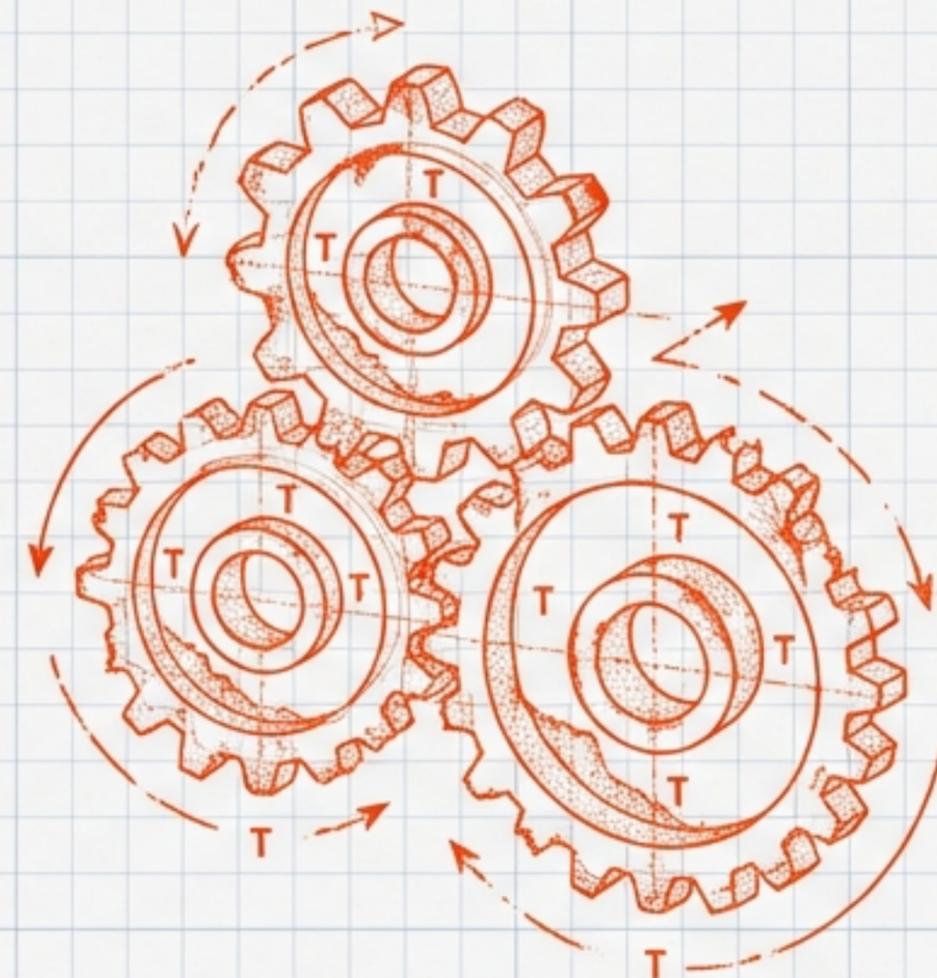
BASED ON NAKAGAWA MASTER'S STRUCTURAL THEORY

# 成功のパラドックス



制度は「失敗」して壊れるのではない。  
「成功」して死ぬのだ。

成功した制度は効率化される。効率化とは「省略」である。  
省略が進むほど運用は速くなるが、その過程で  
「なぜ(Why)」が構造から蒸発する。  
これが、不可視の「死」の始まりである。



成功した制度  
Successful System

Success (成功)



Entropy (エントロピー)



内部実態  
Internal Reality

# 「動いているが、死んでいる」



## 一般的な死

倒産、不祥事、運用の停止。

## 構造的な死

担当者しか分からない。空気を読まないと動けない。  
この状態の制度は、生きていない。  
「権威によって作動させられている」だけだ。

Stability  
(合意安定度)

Responsibility  
(責任追跡可能性)

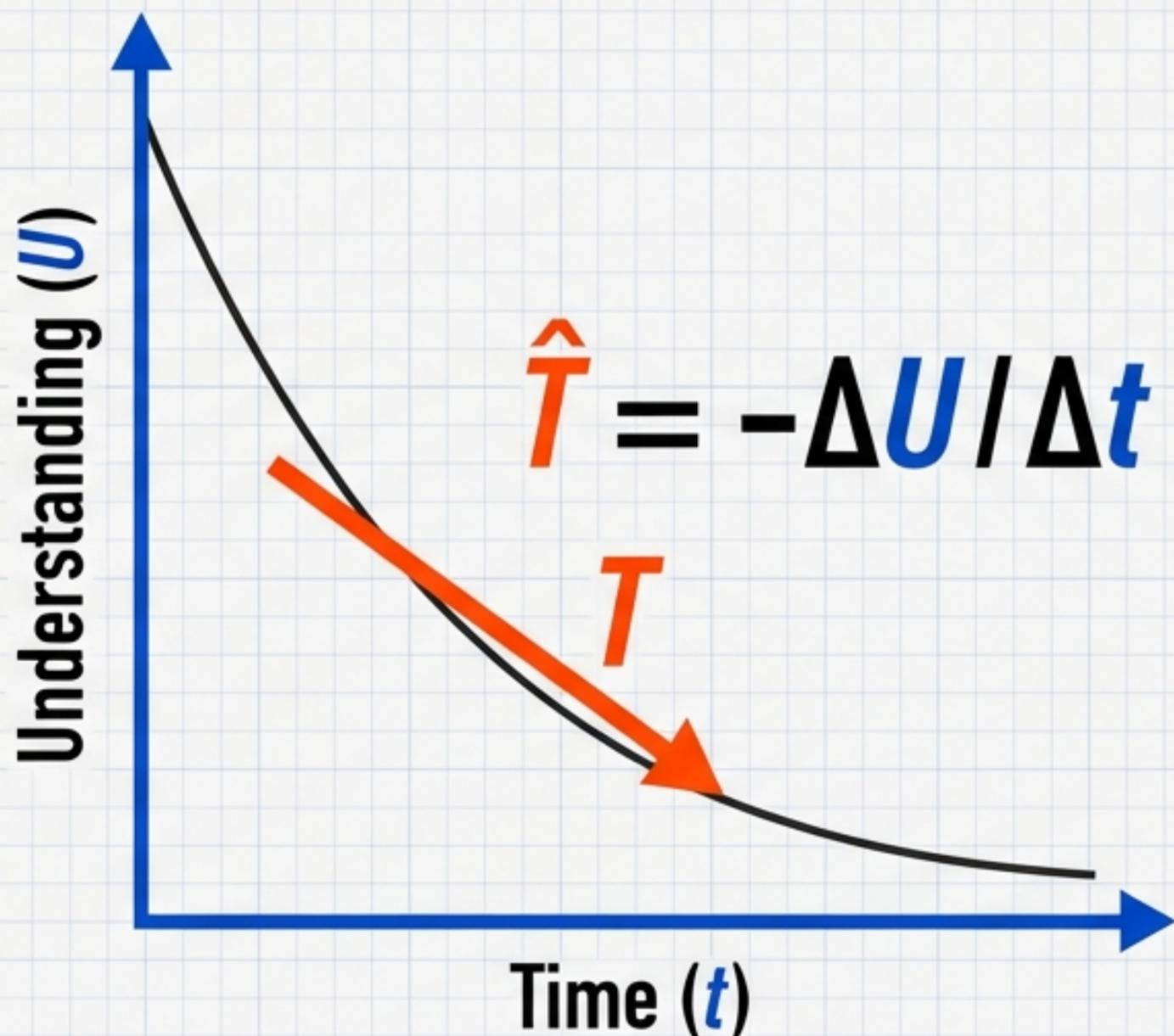
$$\text{\$} = U \times R \times H$$

Understanding  
(第三者再現可能性)

History  
(履歴公開度)

Note: これは「ある時点の状況」を示しているに過ぎない。

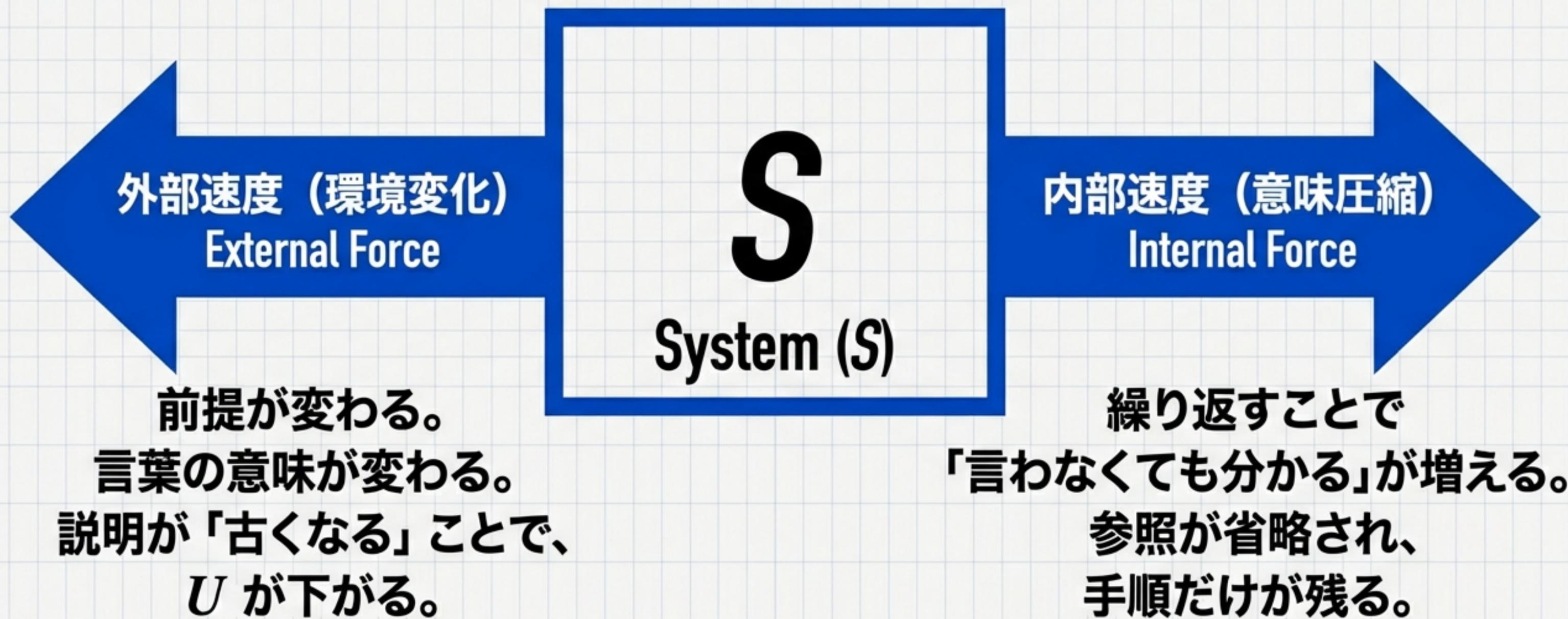
# 時間劣化係数 $T$ (Time Decay Coefficient)



- $T$ は「悪意」や「怠慢」ではない。説明が環境変化に追いつけなくなる「速度」である。
- 重力が物体を下に引くように、時間は必然的に  $U$  (理解) を減少させる。

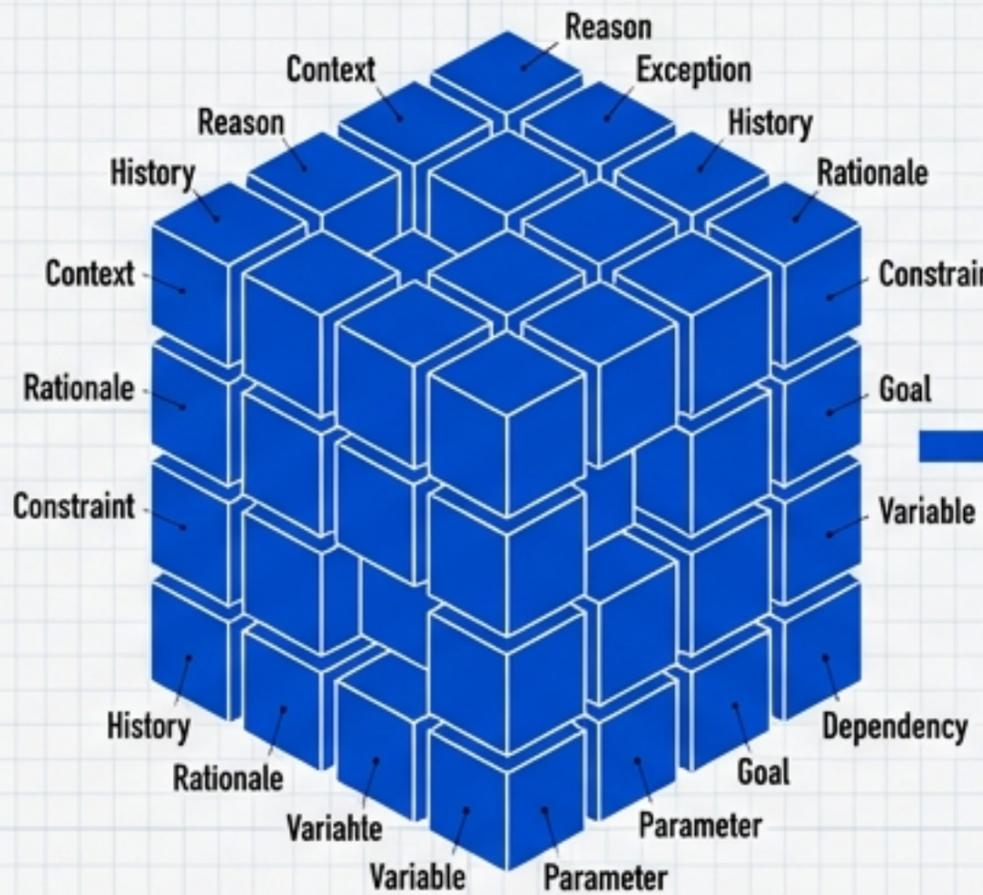
**「何もしなければ、制度は物  
物理法則として死に向かう」**

# 劣化を加速させる2つの速度

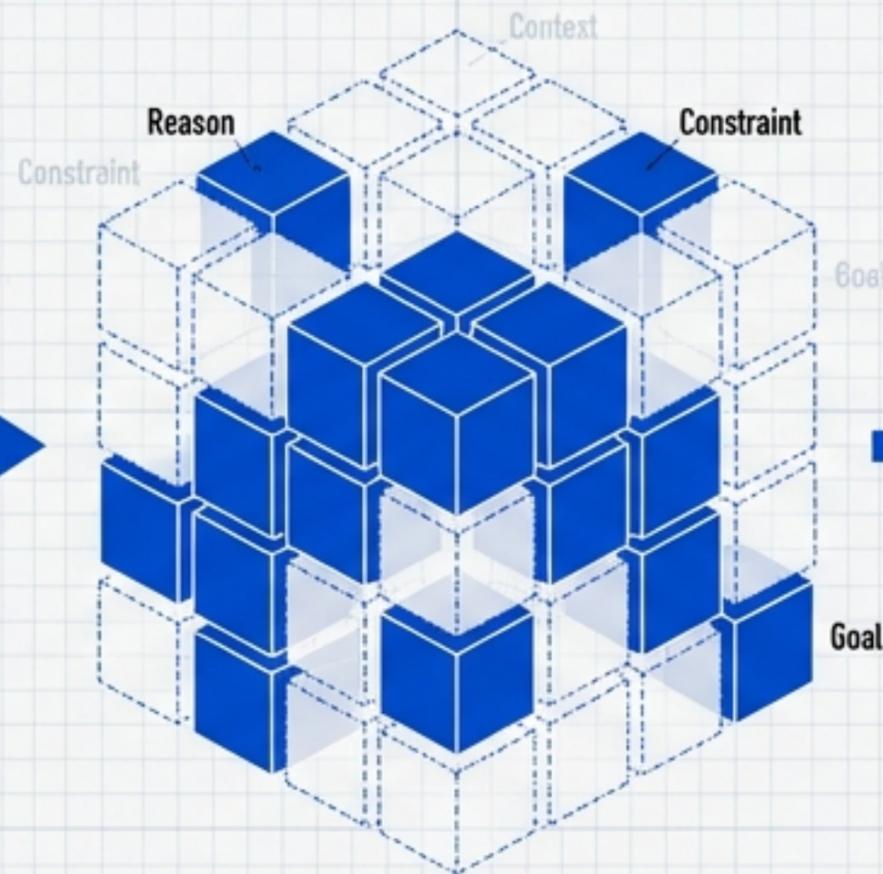


# 意味圧縮のメカニズム

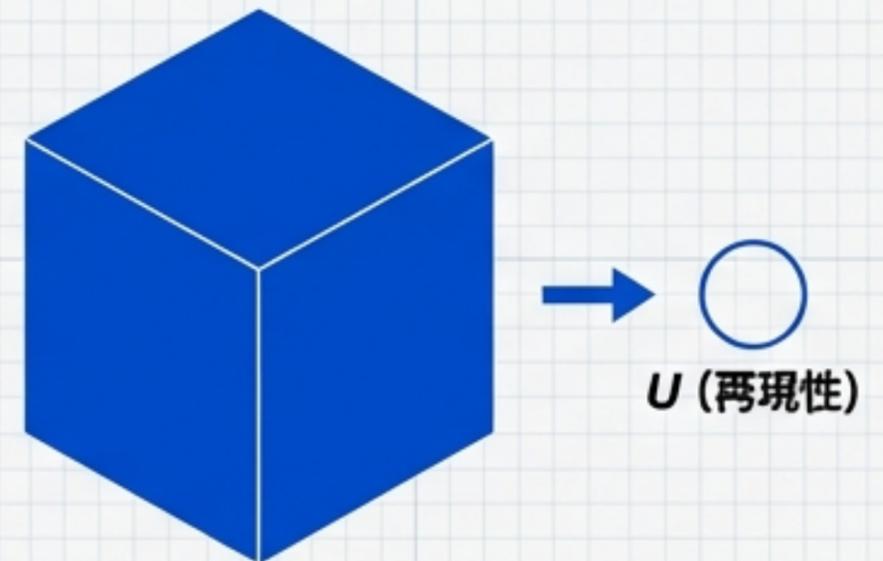
Stage 1: Creation  
(High Resolution)



Stage 2: Repetition  
(Medium Resolution)



Stage 3: Optimization  
(Compressed/Empty)



「効率化は、意味を圧縮する。」

運用回数 ( $n$ ) が増えるほど、コストは下がるが、同時に  $U$  (再現性) も道連れに下がる。

# 権威への相転移 (Phase Transition to Authority)

**Logic-Based (\$U\$ High)**

(DIN Pro Bold / 可変量, 平台野席角 ProN W6)



**Compression**

**Questioning Phase**



「なぜ？」 → 「昔から決まっている」



**Structural Blue**

**Authority-Based (\$U\$ Low)**

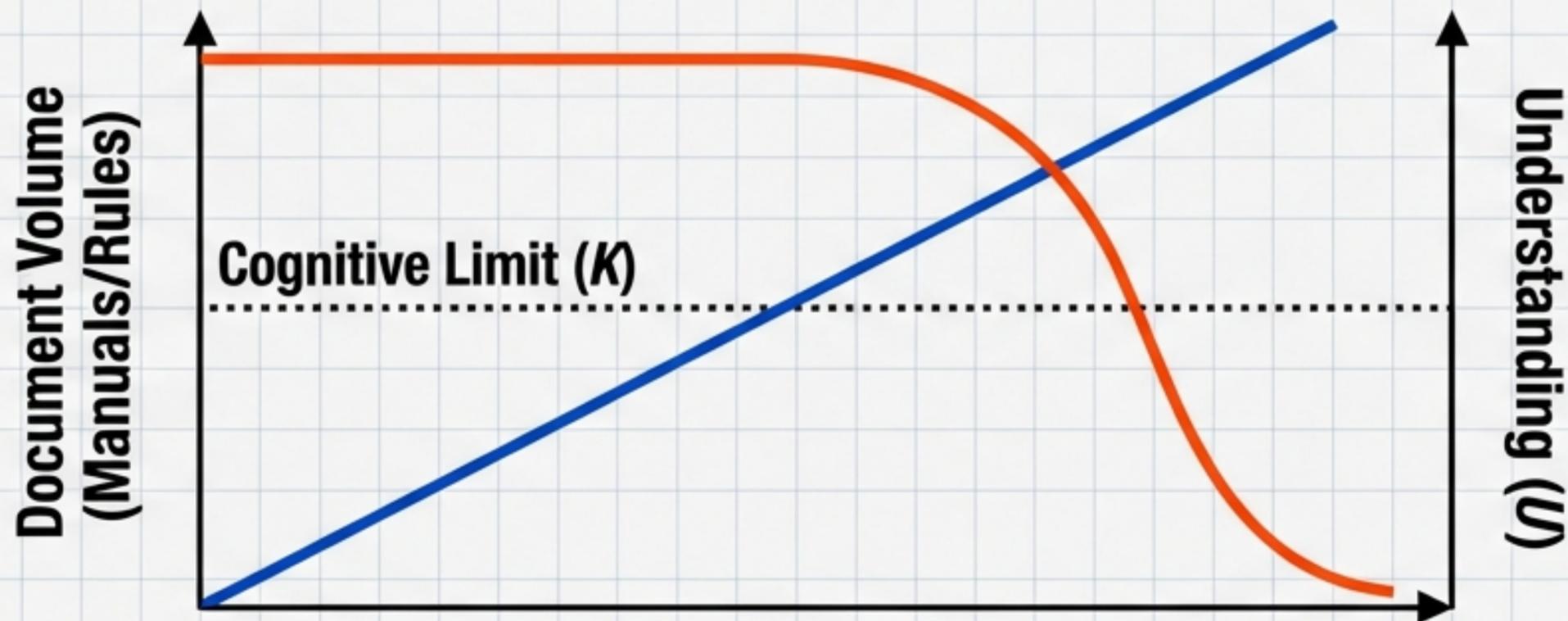
Atmosphere / Boss / Habit

**Critical Warning:**

この状態は反論が出ないため「安定」に見える。だがそれは「観測不全がつくる静けさ」である。

# 擬似更新の罠 (The Trap of Pseudo-Updates)

$$U(t + \delta) \leq U(t)$$

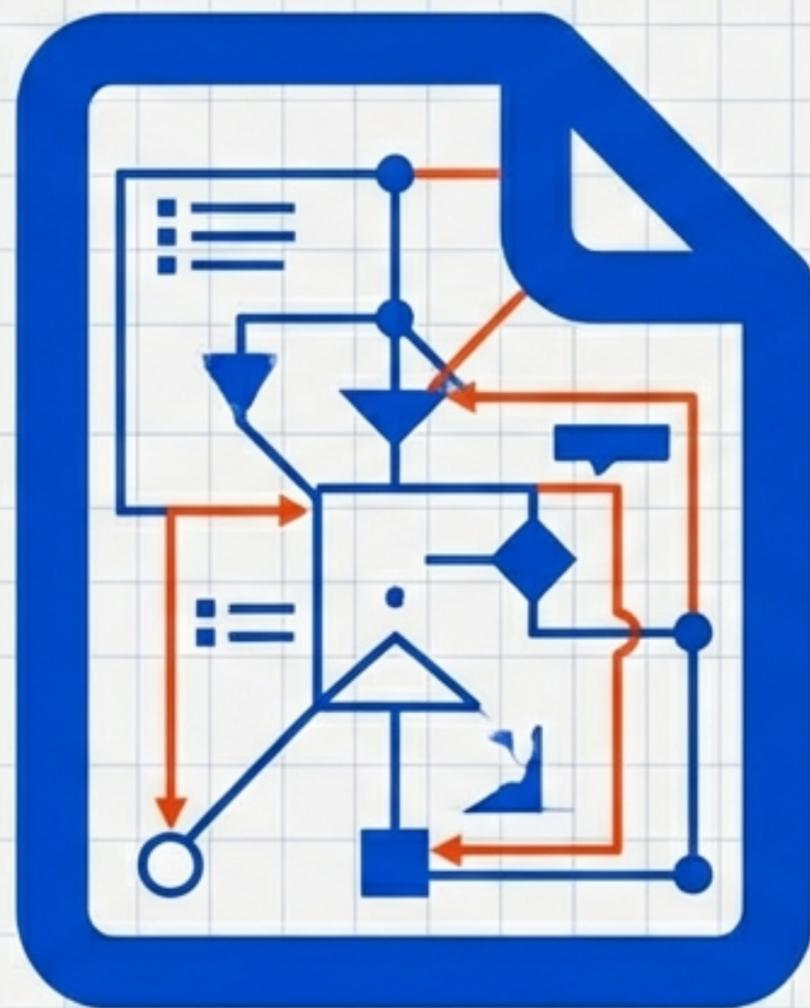


- マニュアルを分厚くする ≠ 理解が深まる
- 会議を増やす ≠ 合意ができる
- 量を増やすことは、認知限界 (K) を圧迫し、むしろ U を破壊する。

# 唯一の延命策：「説明更新」 (Explanation Update)



Compressed File  
DIN Pro Medium / ZIP



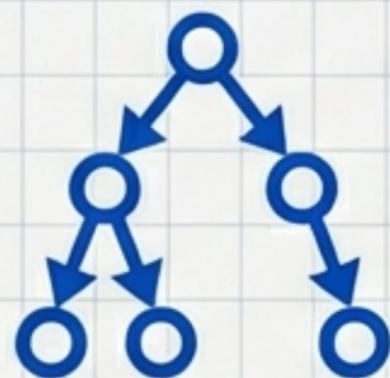
Expanded Structure / 解凍

説明更新とは、  
資料の追加ではない。  
圧縮された意味を  
「解凍」することである。

ルール（手順）ではなく、  
判断理由（Why）を復元し、  
第三者再現可能性  $U$  を  
閾値  $\theta$  以上に戻す  
再接続プロセス。

# 説明更新の4要件

01



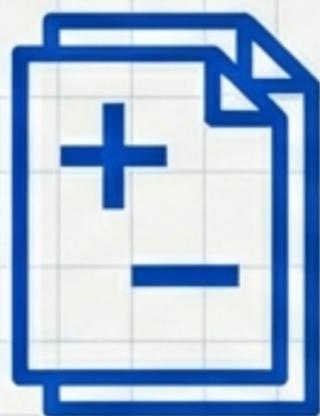
理由の復元:  
「どうやるか」ではなく「なぜやるか」を記述する。

02



前提の再定義:  
制定時と現在で、環境（法・市場・技術）はどう変わったか？

03



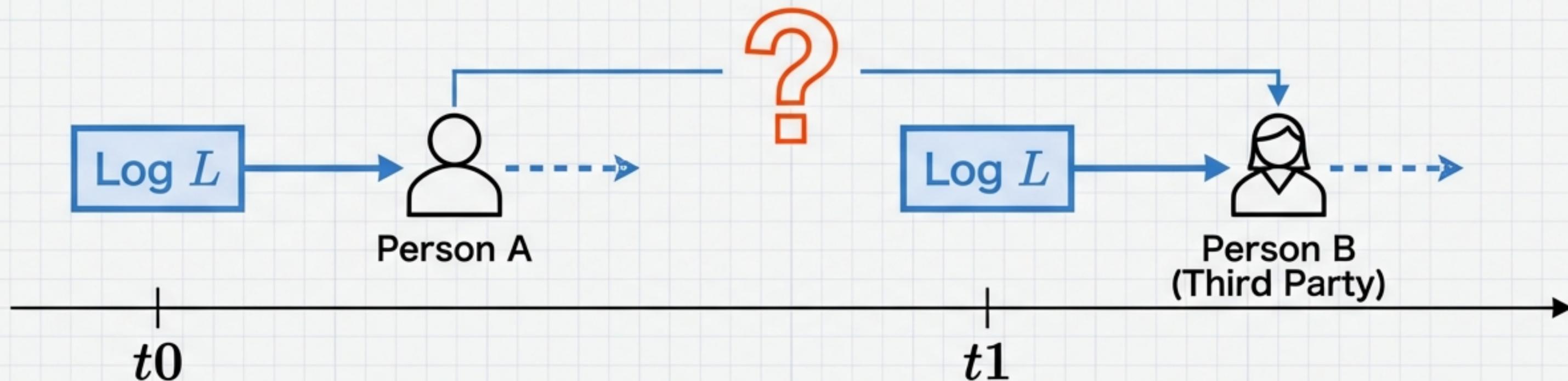
差分の公開:  
変更履歴 (Diff) を検証可能な状態で残す。

04



頻度の記録: 観測窓  $\delta$  ごとに、何回「解凍」されたかを記録する。

# $U$ の計測方法：時間差分テスト



- 人を増やすのではない。**時間をずらすのだ。**
- 同一の判断ログ  $L$  を、時間をずらして第三者  $P$  に渡す。
- もし再現できなければ、その制度は「口伝」で維持されているだけであり、死んでいる。

# 制度寿命の再定義 (Redefining System Longevity)

~~Old Metric: Years since founding (創業からの年数)~~

New Metric: Duration  $U > \theta$  (再現可能性保持期間) →

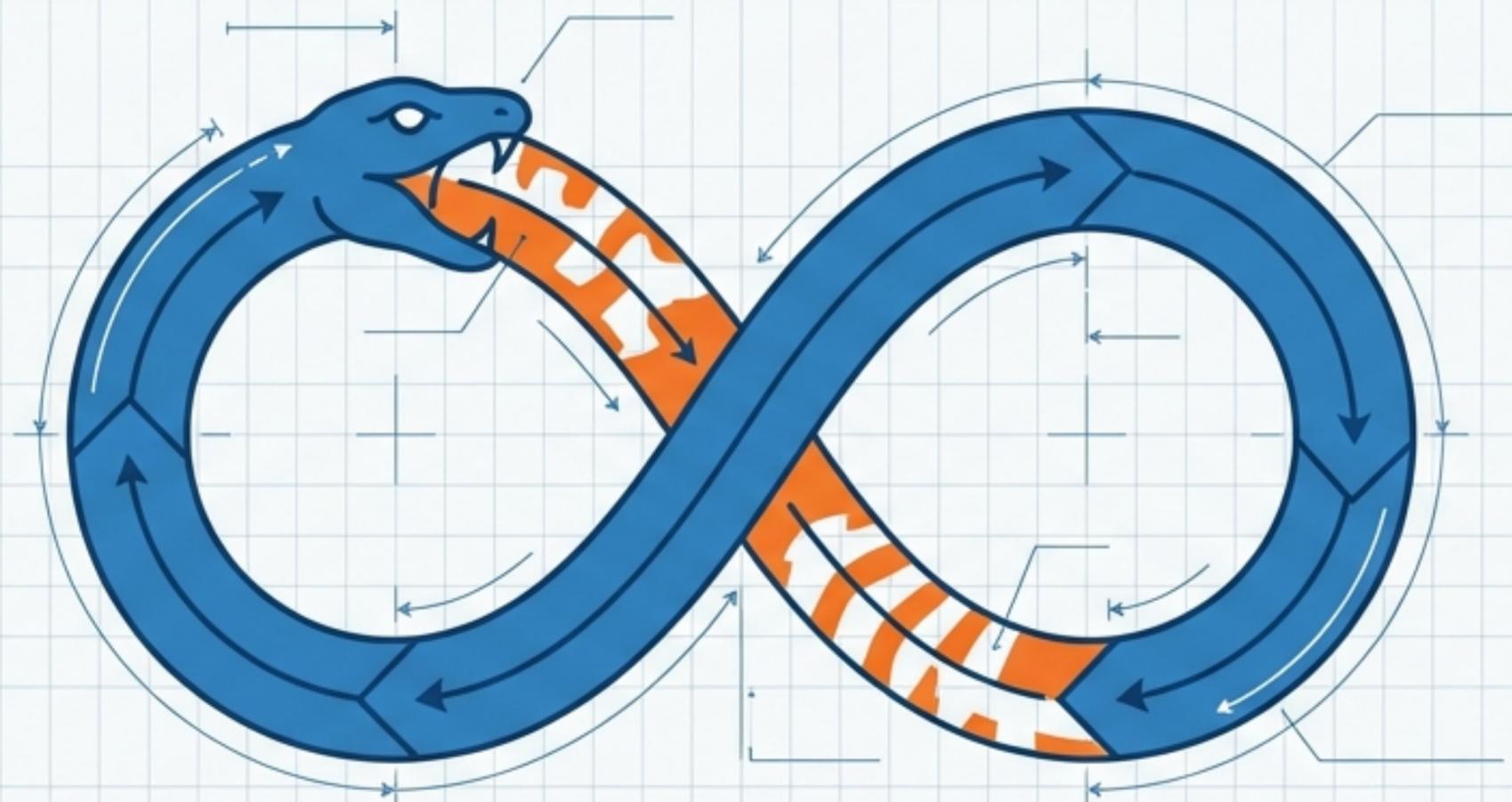
**100年続く老舗企業でも、新人が「なぜ」を理解できないなら、その制度寿命はすでに尽きている。**

# 責任の所在は「事件」ではなく「放置」にある

- 真の過失とは、単発のミスではない。
- $S < \theta$  (臨界割れ) の状態を、観測窓  $\delta$  の間、放置し続けた「時間責任」である。
- 「誰がやったか」ではなく「いつから更新が止まっていたか」を特定せよ。



# 持続とは、変わり続けることの別名である



劣化は止められない。だが、計測と更新はできる。  
「完成品」を目指すな。「更新プロトコルを含んだ装置」を設計せよ。

UPDATE YOUR STRUCTURE. RESTORE THE WHY.

# Source & Credits

**Primary Source:** 中川マスターの灯火構想と構造論  
(**Nakagawa Master's Tomoshihi Concept & Structural Theory**)

**Series:** 合意形成の物理 第5論 (**The Physics of Consensus Vol.5**)

---

**Theoretical Signature:**

NCL-ID: NCL- $\alpha$ -20260215-e2d7e7

Diff-ID: DIFF-20260215-0025

License: Deviation Ledger Compliance / Nakagawa Structural License.